

コムギ株腐病（病原菌：*Ceratobasidium gramineum*）

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による病害である。本病原菌は、主にコムギ、オオムギ、イタリアンライグラス、イネ等のイネ科の作物を犯す。

葉鞘部には周縁が褐色、内部が灰白色の病斑が形成される（図1）。後に稈部に葉鞘部と同様の病斑が形成される（図2）。また、病斑部で折れやすくなるため、倒伏することがある（図3）。

本病の発病は、播種時以降の地温が高いと多くなる。冬期には発病がいったん停止するが、春になって再び発病が増加する。

土壌中や前作の被害茎葉についての病原菌（菌核や菌糸）が越冬して、伝染源になる。春以降の発病は、発病株からの菌糸伸長によっても起こる。

病斑が稈の全周を取り巻いたり、病斑部から折れたりすると20%を超える減収になる場合もある。倒伏すると刈り残しの原因にもなる。

○ 防除方法

（ア）耕種的・物理的防除

- ・地温が高いと発病が助長されるので早播は避け、播種は11月下旬頃（平坦部）とし、早播きはさける。
- ・土壌中の葉鞘が長くなると病原菌と接触する部分が多くなるので、深く播種しない。
- ・株元に土を寄せると発生を助長するので、毎年多発するほ場では土入れをしないで、ロータリーを正転にして中耕を行う。

（イ）薬剤防除

- ・播種前に薬剤を種子に塗沫処理する（小麦に登録農薬あり）。
- ・本病の防除薬剤（散布剤）として銅剤の農薬登録はあるが、防除効果が劣る事例もある。



図1 葉鞘部病斑（春期） 図2 稈部病斑（収穫直前） 図3 本病による倒伏